

進化しつづける母校、SGHへ

●新しい価値を創造し、世界のどこかを支える…！
ちょっと遅くなりましたが、進化しつづける母校・浦和高校が「2014年度スーパーグローバルハイスクール(SGH)」に選ばれたというニュースがありました。

* *

◆2014年度スーパーグローバルハイスクールが決定…筑波大附属など56校

文部科学省は3月28日、平成26(2014)年度スーパーグローバルハイスクール指定校を発表した。246校の公募の中から、筑波大学附属や埼玉県立浦和、品川女子学院など56校が選ばれた。

同省は、将来、国際的に活躍できるグローバル・リーダーの育成を目的に、スーパーグローバルハイスクール(SGH)を指定し、質の高いカリキュラムの開発・実践やその体制整備を進める。指定期間は平成26年度～30年度の5年間。

今回、246校からの公募があり、教育活動の実績を踏まえた計画の実現性や発展性、継続性の評価による審査の結果、国立4校、公立34校、私立18校の計56校が選ばれた。幹事校は筑波大学附属、東京都内は渋谷教育学園渋谷や早稲田大学高等学院、品川女子学院、お茶の水女子大学附属など10校。埼玉県内では県立浦和と筑波大学附属坂戸の2校、千葉県内では渋谷教育学園幕張の1校、神奈川県内では県立横浜国際と横浜市立横浜サイエンスフロンティア、公文国際学園高等部の3校が指定校に選ばれた。

また、今回、初めての公募にもかかわらず、多くの申請があったことに鑑み、グローバル・リーダ育成に資する教育の開発・実践に取り組む高校を「SGHアソシエイト」として位置づけることになった。SGHアソシエイトには、国立6校、公立27校、私立21校の計54校が選定された。

【exciteニュース、2014年3月31日より】

* *

このニュースについて、杉山剛士校長が4月8日の始業式の挨拶の中で次のように話されています。浦高ホームページの校長挨拶から抜粋します。

* *

いよいよ平成26年度が始まりました。

新聞にも報道されましたが、浦高は今年度から国のスーパーグローバルハイスクールの指定を受けることになりました。これは、全国の国公立私立の高校及び中高一貫校5081校の中から、グローバル人材育成に向けた教育を進めている学校、そして進めようとしている学校56校に対し、本年度から5年間の指定がされたものです。大変に名誉あることだと思います。

スーパーグローバルハイスクールの指定に際し、浦高の掲げた研究テーマは「新しい価値を創造し、世界のどこかを支えるグローバル・リーダーの育成」であります。今後、このテーマに基づいて、知徳体のバランスのとれた今までの浦高教育を踏まえた上で、アドバイザーグループの課題研究を深めたり、ミンガンとのサマーセミナーやウィットギフトとの交流などを進化させたり、あるいは昨年度から実施している東京大学と連携したボーイングプログラムを進化させたりする中で、広き宇内に雄飛せん、世界に飛び出し世界に通用する浦高生を育てていきたいと考えています。(中略)

今日は、この研究主題の中の「新しい価値を創造する」という部分について、なぜ新しい価値を創造しなければならないのか、またどうやったら創造できるのかということについて、お話をしたいと思います。なぜ、新しい価値を創造する必要があるのか。一つは今グローバル化が進む中で、それがビジネス的に生き残るための重要な戦略だからです。例としてわかりやすいのは、スティーブ・ジョブズだと思います。彼は、アップル・コンピュータから始まり、iPhone、iPadを発明しました。多くの人が世界とつながる。情報を共有する。そこに喜びを見いだす。まさに、それ以前の社会にはなかった新しい価値を創造したひとりといえると思います。今、実際のビジネスシーンは大変に厳しい。常に新しい商品を開発していかなければ勝ち残れない。そんなことから新しい価値ということがいわれます。

ただもう一つ、ビジネスだけでなく、私はもっと大きな意味で、言ってみれば社会全体をどう構築するかという点で、世界は新しい価値を求めていると思っています。

現代はグローバル社会となりました。グローバル化の波はヨーロッパ・アメリカから、アジア、アフリカへと、必然的に世界隅々までを市場経済に巻き込み、厳しい競争社会になっています。しかしながら、一方で、勝ち組も生まれれば、負け組も生まれます。それをどうするか。グローバル化が世界の果てまで行き尽くしたその社会の先にある、新たな価値観に裏づけられた世界・社会をどのようにイメージし、構築していくか。

かつて資本主義が発生したときは「自由」の価値が叫ばれました。やがて資本主義の中で、格差が大きくなり、「平等」の価値が叫ばれ、社会主義革命が起こりました。しかし、その社会主義も、例えばソ連の崩壊のように大きく変動していきました。「自由」だけの価値でもなく、「平等」だけの価値でもなく、その両方を融合した、それでいて多くの人の胸に響くような「新しい言葉」「新しい価値」が求められているのだと思います。

そういう点では、グローバル社会を生き抜くビジネスシーンでも、またその先の社会の構築を見据える上でも、新しい価値が求められている。今ある価値を学ぶだけでなく、新しい価値を創り出す担い手になるということが大切だと思います。

さらに言えば、私はその担い手として、日本人の持っている精神性は、大いに世界のグローバルリーダーとして重要な役割を果たしうるのではないかと思います。例えば、本校OBの若田光一さんは、現在、国際宇宙ステーションの船長として抜擢されましたが、彼は「和」の精神を大切にしたいとあって、ミッションをリードしています。皆さんもまた、若田さんと同様に、仲間とともに切磋琢磨しながら共に励まし合って成長していくという浦高教育を受けている。これを体験しているというのは、弱肉強食のグローバル社会を乗り越え、世界の平和と繁栄に貢献していく上で、私はとても素晴らしいことだと考えています。今ここにいる皆さんの中から、30年後、40年後、もの凄いグローバルリーダーが出てくる可能性が高いと期待しています。

さて、それでは、どのようにしたら新しい価値が見出せるか。そのことのヒントを次にお話したいと思います。

皆さんは、イノベーションという言葉聞いたことがあるでしょうか。ここ数年よく言われます。辞書で調べてみると、「革新」と出てきますが、ある方がイノベーションというのは、まさに、今お話しした「新しい価値を生み出すこと」と訳したらよいのではないかとっていました。私もなるほどと思いました。

それでは、このイノベーションはどうやったら生まれてくるのか。身近な一つのイノベーションの事例をお話したいと思います。

北海道の旭川に旭山動物園があります。旭山動物園は冬はマイナス25度という極寒の地、旭川にある市立動物園で1967年に開園。入場者数が伸びず、多くの赤字を出し、経営難に陥って廃園が噂されました。それが、1995年に小菅正夫さんが園長に就任して以来、入場者数は増え続けました。どん底時は年間26万人だったのが、就任10年後の2006年には10倍の年間300万人を越え、上野動物園に次ぐ全国二位の入場者数、月間記録では全国一位にもなりました。

何でそうなったのか。そこにあったのがイノベーション。新しい価値を生み出すことでした。

小菅さんは、もともと獣医として旭山動物園に勤めていました。また、大学時代から動物生態学の研究にも打ち込んでいました。その小菅さんが、経営難の動物園の園長に就任するにあたって、動物園の人気のない理由について、仲間とともに根本的に考えたといいます。

そもそも子どもたちは動物園が好きなのはなのに、なぜ、動物園を面白いと言わないのだろう。なぜ、繰り返し動物園に来ないのだろう。その理由を探るために、来園する子どもたちに動物園の印象を聞いてみたところ、「檻の中で寝ている姿、空を見ている姿、あくびをしている姿しか思いつかない。だからつまらない」と。

その言葉を聞いて小菅さんははっとしました。「そっか。動物が最もいきいきする姿を子どもたちの間近で見せたら、みんな動物園に来たがるのではないかと」。例えば、ペンギンだったら陸上にいる姿ではなく、水の中を泳ぐ様子。ホッキョクグマだったら獲物に飛びかかる瞬間。ライオンやトラなどの夜行性の動物なら、昼間ではなく暗闇で動き回る様子。動物生態学で学んだ知識をもとに、まさにそうした場面を見せられないかと考え、「行動展示」という全く新しい考え方に立った施設を、一つずつ作っていきました。

例えば、ペンギンの泳ぐ様子を360度見ることができる「水中トンネル」。ホッキョクグマがダイナミックに飛び込む仕掛けを作った「巨大プール」。そうした新しい価値の発信が次々に評判を呼び、二倍、三倍、四倍と入場者数が増えていく。それならと、それまで閉園していた冬も開業。寒さに強いホッキョクグマやペンギンたちは、極寒の地だからこそ、いきいきと躍動する姿を見せることができました。旭山動物園は、それまで誰もが当たり前に思っていた「檻の中で動物がうろろろする」という動物園のスタイルを、根本から変えてしまったのです。この「行動展示」というイノベーションがなぜ起きたのかというと、そこに「パラダイム・シフト」が起きたからであります。

パラダイム・シフトというのは、パラダイム、つまり私たちが何気なく使っている枠組を変えること、その枠組から思い切って離れることですが、その柔軟な発想ができたわけです。そのきっかけは、子どもの言葉にはっとしたことだったので、その前提として、小菅さんの動物園を何とかしたいという情熱や仲間との議論、つまりチームとしての議論、そして何よりも小菅さんの動物生態学についての圧倒的な基礎知識・基盤があったからだと思います。

新しい価値が生まれる、つまりパラダイム・シフトが起きる要素が、この事例にはいっぱいつまっています。まず基礎基本・基盤を身に付けること、そして何とかしたいという情熱を持つこと、そしてチームとして取り組むこと、その上で枠を飛び出す柔軟な発想ができることだと思います。（後略）。

* *

日々進化する母校、私たちも支援という枠だけでなく、柔軟な発想でパラダイム・シフトを…。